

白山ふるさと文学賞

第一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生作文の部 優秀賞

小さくて大きなもの

松任高等学校二年 野根 翠 のね みどり

受賞の言葉

優秀賞という素晴らしい賞を頂けたことをとても光栄に思います。この経験を生かして、今後より良い作品を書けるよう日々努力していきたいと思えます。ありがとうございます。

この広い地球のどこかの病院で人間の赤ちゃんが産まれたら、家族や親戚は皆喜ぶはず。この広い地球のどこかの動物園でパンダの赤ちゃんが産まれたら、飼育員やお客さんは皆喜ぶはず。では、この広い地球のどこかで蟻の赤ちゃんが産まれたら、一体誰が喜ぶのだろうか。

この夏、私はボランティアという新しい経験をした。私は生徒会に所属しており、先生に「県の高校の生徒が集まってボランティアを企画する活動に参加してみないか。」と誘われたことがきっかけだった。今まで経験した学校の愛校作業や募金活動などのボランティアとは異なり、自分で企画を立てられることに魅力を感じ、友達と一緒に参加することにした。

実際に参加してみると、意識の高い人達が多く、既に行動をしている人もいた。そんな状況に驚きながら、私達の班は先日行われたインターハイの会場で四日間、自分達に出来る活動をしようとした。時間をかけて話し合い、具体的な活動として会場に訪れた人への無料お茶出し、パンフレットを配っての石川県PR、会場周辺のゴミ拾いに決定した。

当日、会場に向かうとテントが設置されており、「無料お茶出し」と書かれた看板が立てられていた。自分達で企画した活動が形となることの喜びとどこか不思議な気がして、まるでこの間見た夢が正夢になることのようにだった。開始の時間になり、「お茶、いかがですか。」と試合に出場する選手、応援に訪れた家族、観戦に来た中学生といろいろな人にお茶を配った。「ありがとう」と受け取ってくれる人、「暑いね。」と声をかけてくれる人、「お疲れ様。」と言ってくれる人、いろいろな人がいて、いろんな言葉を聞いてとても温かい気持ちになった。心の底から「ボランティアっていいものだ。」と感じた。ほんのささいなきっかけで参加することになった活動は、私の心を包んでくれる大きなものになった。

二回戦、三回戦と進んでいくにつれ、徐々に選手や応援の人達の人数も少なくなってきた三日目。私達のところにある三人の人達が「お茶ください。」とやってきた。私はお茶を渡し、「暑いですね。」「どちらから

いらっしやったのですか。」など少し話をした。三人は初めは私達と話をしていたがしばらくして、三人同士で話し出した。

「暑いからここにいさせて。」

そう言って三人は、私達がお茶を配っている真横に立って盛り上がりつつある。暑いから仕方ないかと最初は思っていたものの、五分、十分と経つても動かない三人にだんだん怒りがこみ上げてきた。「すみません。他の場所に移動して下さい。」ただそれだけを伝えればよかったのだが、相手は大人で私はボランティアをする立場だと考えると、言葉はなかなか出なかった。三人が帰った後も一日目、二日目では感じなかったものが心の奥に残っていた。

しばらくして、また別の五人の人達がやって来た。すると突然、五人は自分達でコップにお茶を注ぎ出した。本来は、私達が人数分のお茶をくみ、コップを手渡しするというシステムだ。五人は少し前にもお茶を飲みに来てくれていて、そのシステムを知らない訳ではない。

「どうせ怒られんからいいって。」

五人は笑っている。とても腹が立った。「やめて下さい。」と叫びたかった。だが、そんな気持ちとは裏腹に私と友達はただぼう然と立っていることしか出来なかった。

私は気持ちを落ち着かせようと一旦、お茶の係りから離れて会場周辺のゴミ拾いをすることにした。「考えないでおう、忘れよう。」自分に言い聞かせながら煙草、ペットボトル、パンの袋に手を伸ばしていく。しかし、苛立ちと自分が何も言えなかった不甲斐なさで自然と涙が溢れてきた。何人もの人が私の横を通り過ぎて行った。ふと、一人の女性の声が聞こえた。

「お疲れ様。」

そっと差し伸ばされる四文字だった。振り返った時には後ろ姿しか見えなかった。だんだん離れていくその後ろ姿に私は、何度も心の中で「ありがとう」を繰り返すことしか出来なかった。再び流れてきた涙は、さ

つきのものとはまた違う味がした。

この夏の経験は私に小さくて大きなものを教えてくれた。あの女性の「お疲れ様」は挨拶程度の小さなものだったかもしれない。しかし、その言葉が私にとって大きな光になったことは紛れもない事実だ。年を重ねるにつれ遠くに立つ、より大きなものを求めてしまう。だが、近くに落ちている小さなものにもそれと同じくらいの光がまっている。そんな教訓を学んだ気がした。

この広い地球のどこかの病院で産まれる人間の赤ちゃんしか知らなかった私が、この広い地球のどこかで産まれる蟻の赤ちゃんを知ったら、世界はきつと広くなる。この広い地球のどこにいても幸せを一生、感じながら生きていられるのだ。

